

水 稲 平 年 収 量 の 検 討 状 況 に つ い て

- 温暖化が、水稻の平年収量にどのような影響を与えるかを検討するため、「水稻平年収量に関する検討会」を設置。

最近の気象の変化と米生産への影響（「中間的まとめ」(19年6月)のポイント）

〔 最近の気象の変化 〕

- 夏の気温は徐々に上昇傾向にあるが、全国、北海道は年間平均を下回っている中で、**西日本は年間平均を上回っている。**

	年間平均	夏(7～9月)
全 国	※1.06℃/100年	※0.87℃/100年
北日本	※0.96℃/100年	0.45℃/100年
西日本	※1.15℃/100年	※1.17℃/100年

(※は、統計的に有意)

(参考) 登熟期間の最低気温

	(20年前)	(現 在)	(上昇度)
北海道	12.6℃/日	<u>13.7℃/日</u>	+1.1℃/日
九 州	17.5℃/日	20.4℃/日	+2.9℃/日

- 降水量は、特に冬に大きな減少傾向が認められるが、夏はそれほどでもない。
 ○全天日射量についても、夏は明瞭な長期変化傾向はない。
 ○台風の発生数についても、明瞭な傾向はない。

〔 米生産への影響 〕

- 気温(特に、登熟期間)

— **夜温が高くなり、品質や収量にマイナス** —

[北海道]

- ・登熟期間の最低気温について、米生産に大きな影響はない。
- ・また、気温上昇も夏はさほど大きくなく、近年の豊作は温暖化の影響ではないとの見方。

[九 州]

- ・登熟期間の最適な夜温は16℃前後との研究成果もあり、**夜温が高すぎると登熟は低下。**
- ・特に、九州など西日本では温暖化等により**最低気温の上昇度が大きく、収量にとってマイナスの影響。**

- 降水量、全天日射量とも長期的な変化傾向はみられないため、稲の生育に特段の影響を与えているとは考えにくい。

- 台風による被害が、頻発化しているとまではいえない。

また、被害の程度は、襲来の時期やコースの要因が大きい。

平成19年 米の登熟期間の高温と作柄への影響

作況指数 (10/15)	全 国	99
	北海道	98
	九 州	95

〔 19年 夏の気象 〕

○気温は、8月からは全国的に高く、特に9月はかなり高い状況で推移したため西日本では観測開始以来の記録を更新した。

《平年差》	7 月	8 月	9 月
北日本	-1.0℃(-)	1.2℃(+)	1.6℃(+)*
西日本	-0.7℃(-)	1.3℃(+)*	<u>2.7℃(+)*</u>

(注) (-):低い、(+):高い、(+)*:かなり高い

○台風の上陸数は概ね平年並みであり、早期米地帯を除き大きな台風被害はなかった。

〔 九州の作柄への影響 〕

・登熟期が高(夜)温に経過したため、登熟が平年を大きく下回り、9/15時点に比べ、作柄は大きく低下した。

《 佐賀県の場合 》

〔作況指数〕	もみ数 9/15	粒の充実等 に大きく影響	登熟 10/15	内訳(平年比)
	<u>100</u>		<u>95</u>	粒数 99 粒重 98 品位 98 (乳白等)

〔登熟期の最低気温〕	(20年前)	(最近5か年)	(本年)
	16.3℃/日	<u>19.9℃/日</u>	<u>22.1℃/日</u>

〔 最近の作況(佐賀県) 〕

	H15	H16	H17	H18	H19
	9/15 最終	9/10 最終	9/15 最終	9/15 最終	9/15 (10/15)
作 況 指 数	97 → 95	98 → 80	100 → 93	74 → 49	100 → 95
登熟期の被害	高温・日照不足	高温・台風(連続)	高温・ウンカ	高温・台風(潮風害)	高温

- ・15年産から、高温による影響を受けるとともに台風やウンカの被害が重なり、作況は著しくは低下していた。
- ・本年は台風被害がない中で、作況は9/15から10/15にかけて、5ポイント低下しており、登熟期の高温の影響が顕著に出ている。

○ 今 後

本年の気象から、登熟期間の高(夜)温は作柄にとってマイナスの影響であったと認められるが、次回検討会(12/12 最終回)で更に検証し、20年産以降の平年収量に適切に反映する。